

### 第3回専門職大学基本計画検討委員会の開催結果について

1 日 時 令和3年5月26日（水） 13:30～16:00

#### 2 委員会出席者

○会長 生源寺眞一（福島大学食農学類長）

○委員

芦谷竜矢（山形大学農学部教授）、今井敏（（独）農林漁業信用基金理事長）、小沢互（山形大学農学部教授）、北柴大泰（東北大学農学部教授）、野堀嘉裕（山形大学名誉教授）、藤井弘志（（株）ファーム・フロンティア取締役会長）、村松真（山形大学地域教育文化学部准教授）、五十嵐一雄（山形県認定農業者協議会会長）、早坂和紀（（株）SAKU-Labo取締役）、遠田勝久（（有）遠田林産代表取締役）、阿部清（（公財）やまがた農業支援センター副理事長）、舟越利弘（山形県立農林大学校長）、遠田達浩（山形県教育次長）

○オブザーバー

後藤雅喜（山形県農業協同組合中央会 参事）

#### 3 会議の概要

事務局から「中間報告後の検討（変更）状況」、「地域連携PTの検討状況（臨地実務実習）」及び「附属農林大学校機能強化検討PT、専門職大学就農等支援PTの検討状況」について資料により説明の上、意見交換を行った。

#### 【主な意見】

##### ○臨地実務実習について

- ・多種多様な受入先をバランスよく確保できたことは山形県の専門職大学として素晴らしいこと。しかし、農家と言っても大小様々ある。教育に関わることなので、実習先の基準や、水準を合わせる必要がある。
- ・受入農家の教育的視点をそろえるため、研修を行ってから進めるとよいのではないか。また、技術は日進月歩なので、その後もスマート農業など先進技術の研修を受入農家にして、新たなものを実務的に入れていくとよいのではないか。
- ・臨地実務実習の実施時期は、作業内容を考慮して定めるとよい。
- ・臨地実務実習先は、内容が大事なので吟味して欲しい。農繁期に実習をしてしまうとただの作業員になってしまうのでよくない。農閑期に実施すれば、経営者の人生論、考え方を教えてもらうことができる。技術はどこでも学べる。
- ・実習生にも作業をしてもらうだけでなく、取引先に一緒に来てもらうなど、経営者と同じ立場で見ってもらうことが大事である。
- ・実習先に宿泊できた方が、コミュニケーションがとりやすく、研修もしやすいと思う。それができるサポートもあるとよい。
- ・臨地実務実習は卒業後の就職先にもつながるもの。受入先とつながり、事業体の考え方を学べると良い。マッチングが大事だ。

- ・臨地実務実習が多いのは良いことだが、リカレント教育と重複すると思うので、棲み分けが必要である。
- ・臨地実務実習について、よい学びとするにはマッチングやフォローが大事。コーディネート力も必要だが、マッチングがうまくいかない時もあるし、学生も若くて、個性があるので、サポートできる体制が大学にあると良い。

### ○地域振興について

- ・地域振興について、学生と身近な市民とが日々の交流を図れるとよい。交流を図ることが教育の面でもプラスになると思うし、長い目で見れば周辺の市町村の活性化にもつながると思う。
- ・空間的に魅力があるまちが大事。大学のあるまちは魅力ある場所にしないといけない。学生にどういうまちがよいか、色々意見を聞いてみてはどうか。それは保護者にとっても魅力になる。

### ○編入学について

- ・附属や県内外からの編入学の要件や水準はどのような想定なのか。1年から入学した学生とのバランスが気になるところ。
- ・編入学の水準の話だけではなく、人数も併せて検討した方がよい。在學生と編入組の双方によいようになるとよい。編入学生は一定の人数がいるとよい。社会人入学の考え方にも影響があるかもしれない。

### ○時間割、カリキュラムについて

- ・時間割の考え方について、コロナ収束後もリモート講義は少しずつ普及していくと思う。これを使って、将来、公開授業や他大学との単位互換をするとよい。併せて、そうなることを考慮し、授業時間について、100分授業を行う大学が出てきているので、検討してはどうか。
- ・現在伸びているのは、複合化ではなく、多角化している人なので、多角化についてもっと学んだほうがよいのではないか。
- ・海外の農業政策が変化している。それが日本の農業にどのような影響を与えるかは未知数であるが、日本の農業や食品産業が変わる可能性もあるので、冷静に見るとともに、アンテナを高く、懐を深くしておく必要がある。
- ・カリキュラムについて、変化の大きい時代なので、変化に対応できる、フレキシブルに組める余地を残した方が、魅力形成にもつながる。
- ・社会人入学の視点がカリキュラムから抜けているのではないか。支援センターで行っている新規就農者研修受講者にアンケート調査をすると、コースで勉強したいとの声がある。専門職大学の2年次、3年次から入り、高度な学びができるとよい。

### ○教職員の指導体制について

- ・定員が少ないので、オーダーメイド的な柔軟な対応ができるように、教職員や関わる人に研修が必要ではないか。
- ・学生に対し、教育や生活だけではなく精神面のサポートやカウンセリングが必要。
- ・教育は技術的な側面がある。山形大学などの教育学部の所属教員の意見を聞く機会を設けてはどうか。教育技術は日々進化している。また、FD、SDを作っておくべきである。その際に、専門職大学独自の研修テキストを作り、教職員スタッフの統一

的意見や同調しやすい仕掛けを作るとよい。

FD (Faculty Development) : 大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究

SD (Staff Development) : 大学の教育研究活動等の適切かつ効果的な運営を図るため、その職員(※)に必要な知識及び技能を習得させ、並びにその能力及び資質を向上させるための研修の機会を設けることその他必要な取組

※事務職員のほか、教授等の教員や学長等の大学執行部、技術職員等も含む

- ・キャリアサポートセンターには経験の豊富な方、専門的な職員を置くと良い。企業の雇いたいという気持ちをくみ上げ、接点を持てるようにするとよい。
- ・卒業後の就農に向けて、早くから準備できるように、キャリアサポートセンターでサポートできるとよいのではないかな。
- ・教える側と教えられる側、学生間など、人と人が関係するのが大学なので、色々な問題が出てくることも考慮して、システムや制度を作ると良い。

### ○魅力ある大学について

- ・若手の大学教員確保は、競争が激しくて難しい。確保には、研究環境の整備と研究時間の確保が大事。魅力的な大学は、教員にとっても魅力的かという視点もあるとよい。カリキュラムは素晴らしいと思う。
- ・東北の専門職大学なので、山形以外からも来てもらうようにした方がよい。
- ・大学の開学延期に伴い、専門職大学への県民や関係者の気運や関心が低下しないように有効な取組みをすべき。そのような観点から、これまでの検討状況について、幅広い人の意見を聞き、そのことで関心を持ってもらってはどうか。
- ・魅力的な出口、リース型団地など就農についても考えるのはよいこと。入口と出口を一体的に考えるとより魅力になってよい。
- ・新しい専門職大学ができ、生徒の選択肢が増えるのは良いことだが、生徒、保護者、高校側の専門職大学の認知度が足りない。もっとPRしてはどうか。その際、高校生からすると、どんな学びをするのかも大事だが、試験内容や学費なども必要。

以上